

論文題目	同性愛嫌悪というマイノリティ
氏名	浦野咲子
メジャー	哲学
<p>本稿では日本の同性愛嫌悪とはどのようなものか、同性愛嫌悪者による同性愛差別をなくすにはどうしたらよいかを論じる。同性愛嫌悪とは、同性愛者や同性愛に対する嫌悪感や恐怖のことである。同性愛嫌悪の原因は大きく2つ上げられる。1つ目は、知識不足が原因のものである。性的なマイノリティに対する知識が得られなかったために、マジョリティな生き方以外が理解できず否定してしまうというものだ。2つ目の原因は、信仰している宗教が同性愛を禁止しているため同性愛に否定的な思想をもつことである。日本に同性愛を罰する法も宗教もないにもかかわらず、静かに存在している日本の同性愛嫌悪は「おとなしいホモフォビア」と呼ばれている。</p> <p>日本では、江戸時代までは女性の同性愛には非寛容だったものの、男性の同性愛には寛容であった。そのため現代にある日本の同性愛嫌悪は明治時代以降のものであると考えられる。西洋にコンプレックスを持っていた当時の明治政府は、同性愛を西洋から見下されるような後進的な行いとみなし禁じていた。また、男らしさ、女らしさを絶対化させ、男女以外の性は「偽りの性」であるとした。現代まで続く同性愛差別はこのような社会的に生み出された異性愛主義が原因になっていると考えられる。</p> <p>近年では同性愛者の社会的権利を認めようという動きが各国で広まっており、日本でも各地で同性パートナーシップ制度が整備されてきている。その一方で、異性愛主義社会において育った世代の同性愛嫌悪者を、糾弾するような発言やネット記事が目立つようになってきた。そこでは、同性愛への抑圧を批判するために、同性愛嫌悪の非合理性・非道徳性が喧伝されている。だが同性愛嫌悪感情は、社会的に醸成された側面もあり、必ずしも個人の意思によって自由に換えられるものではない。これは道徳的判断における主観主義においても確認できる。</p> <p>主観主義の有力な立場の一つに、道徳上の判断は、我々の感情に基づいているのであり、それ以上の何ものでもないというものがある。こうした立場について、錯誤理論であるとみなす者や、ニヒリズムを核にしているため道徳理論として脱線していると主張する者もいる。たしかに、主観主義が道徳理論としての有益性について疑問を持たれることが多いが、我々の道徳上の判断が感情に基づいていることは否定し難い。さらに、そうした感情を持つことそれ自体を批判することはできない。したがって、同性愛嫌悪者が嫌悪感情を持つこと自体を批判することは極めて難しい。</p> <p>同性愛嫌悪感情自体を批判できないとき、同性愛差別をなくすためには同性愛嫌悪者に「寄り添った」方法を考える必要がある。すなわち性犯罪抑止や性教育、法整備などの観点から、同性愛嫌悪者や同性愛者、異性愛者など複数の立場に有益な形で議論をしなければならない。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>著者は、我が国の同性愛嫌悪について、その成り立ちと現状を分析した上で、感情と道徳的判断についての倫理学上の議論を参照しながら、解決を図ろうとしている。主観主義についての検討が十分ではなく、また提案された解決策も吟味がまだ必要であるが、我が国独特の同性愛嫌悪の状況を繊細に分析した上で、哲学的な知見を応用しながら、解決策を創造できている点では極めて興味深い論考である。その点において、本論考は今後、同性愛嫌悪感情を研究する人々にとって、参照に値する。したがって、本論考を優秀卒業論文として推薦する。</p>	